

漢法苞徳塾資料	No. 113
区分	治療論・治則
タイトル	刺法の前提的な問題 いわゆる運動器疾患の治療に関連して
著者	八木素萌
作成日	1992.07.12

1. 配穴論の前に

鍼灸治療にあつては、如何に「配穴」「撰穴」「取穴」すべきであるか？と言う問題は、非常に重要な問題であり、選択し施術する手技とその運用の巧緻さの度合いが治効を大きく左右する。この事と並んで、治療効果を大きく左右するのが、診断の正確さ緻密さの問題であり、両者の熟知は不可欠な事であるのは言うまでもない。

治療効果に大きく影響するのは、

「診断」＋「治療方針」＋「治療手順」＋「配穴・撰穴・取穴」＋「手技・施術」＋「養生」である。良い治効の為には、これらの全体が適切であり正しいものであることは不可欠である。

病変の症候的な表現を大分類して、「六変」として区分したり「三変」として区分したり「気の滑濇悍」によって区分したり、その他に対応する手技的な特徴を『靈枢』では描出している。それは、手技の帯びている生理的・治療的作用の基本的なものを、傾向的に或る程度を理解させるものである。「六変」のように、疾病の体表に現われている状態を把らえて、これに応じた手技・術を大分類して記述している。

病変を把える視点として、刺鍼の手技とその治療的作用との関連において分類し整理する。或は、角度を変えて表現すれば、刺鍼手技の幾つかの生理的治療作用を運用する為という角度から病変を分類して見せている。これと、経脈の機能と経穴の治効的作用と、そして正確な診断との四者と、手技を的確に運用できる技能能力を加えたもの、この五者の関の力量がバランス良く備えられている治療家が求められるのである。

約言すれば、「どのようにツボを決めツボを取るか？」の前に、「診察手技手法」「病証字」「診断学」そして「経絡経穴学」「刺鍼手技手法の学と訓練」が必要なのである。このことは、日本の現在の鍼灸教育の実情を思うとき強調しないわけには行かない。

2. 刺法の大分類

①『靈枢』九鍼十二原第1→「補・瀉・泄・除」と刺法

「…凡用鍼者・虚則実之・満則泄之・宛陳則除之・邪勝則虚之…」

※「虚」、「満」、「宛陳」、「邪勝」それぞれへの判断がある。

②『靈樞』寿夭剛柔第6→「三变」：「營」・「衛」・「寒痺留経」の刺法

「…刺營者出血・刺衛者出氣・刺寒痺者内熱…」

「…營之生病也・寒熱少氣・血上下行・衛之生病也・氣痛時来時去・怫愠賁響・風寒客于腸胃之中・寒痺之為病也・留而不去・時痛而皮不仁・黄帝曰・刺寒痺内熱奈何・伯高答曰・刺布衣者・以火焯之・刺大人者・以藥熨之…」

「榮之生病」には「寒熱少氣・血上下行」と言う特徴があり、「衛之生病」の場合には「氣痛時来時去・怫愠賁響・風寒客于腸胃之中」と言う把握があり、「寒痺之為病」には「留而不去・時痛而皮不仁」と言う要約した把握がある。

③『靈樞』邪氣藏府病形第4→病の六变とその刺法

「…諸急者多寒・緩者多熱・大者多氣少血・少者血氣皆少・滑者陽氣盛微有熱・濇者多血少氣微有寒…刺急者・深内而久留之・刺緩者・浅内而疾発鍼・以去其熱・刺大者・微瀉其氣・無出其血・刺滑者・疾発鍼而浅内之・以瀉其陽氣・而去其熱・刺濇者・必中其脈・隨其逆順而久留之・必先按而循之・已発鍼・疾按其痛・無令其血出・以和其脈・諸小者・陰陽形氣俱不足・勿取以鍼・而調以甘藥也…」

六变とは、「急」「緩」「大」「小」「滑」「濇」と言う状態を指しており、その病理的な意味は、それぞれにおいて基本的には「寒」「熱」「多氣少血」「血氣皆少」「陽氣盛微有熱」「多血少氣微有寒」の状態であるとして把握して、それぞれの状態に応じる刺鍼技法を記述している。

④『靈樞』根結第5→氣の状態（滑・濇・悍・深・浅）とその刺法

「…氣滑即出疾・其氣濇則出遲・氣悍則鍼小而入浅・氣濇則鍼大而入深・深則欲留・浅則欲疾・以此觀之・刺布衣者深以留之・刺大人者微以徐之・此皆因氣標悍滑利也…」

「氣の状態」を「滑・濇・悍・深・浅」の五通りに見ている。そしてそれぞれの状態に対応する刺鍼技法を記述している。

⑤『靈樞』根結第5→形・氣・病氣と補瀉の原理

「…黄帝曰・形氣之逆順奈何・岐伯曰・形氣不足・病氣有余・是邪勝也・急瀉之・形氣有余・病氣不足・急補之・形氣不足・病氣不足・此陰陽氣俱不足也・不可刺之・刺之則重不足・重不足則陰陽俱竭・血氣皆尽・五臟空虚・筋骨髓枯・老者絶滅・壯者不復矣・形氣有余・病氣有余・此謂陰陽俱有余也・急瀉其邪・調其虚实…」

刺法を選択する病証論的な枢要点の記述として、極めて重要な論述であり『鍼灸問対』には詳しい注釈があり、湯液における「補瀉論」においても『医学発明』『蘭室秘蔵』その他を見れば明らかのように、治法を選択決定する上の重要な拠り所となっている。

⑥『靈枢』寿夭剛柔第6→「風」と「痺」を論じる。

「…刺之有理・謹度病端・与时相応・内合于五臟六腑・外合于筋骨皮膚・是故内有陰陽・外亦有陰陽・在内者・五臟為陰・六腑為陽・在外者・筋骨為陰・皮膚為陽・故曰病在陰之陰者・刺陰之榮愈・病在陽之陽者・刺陽之合・病在陽之陰者・刺陰之經・病在陰之陽者・刺絡脈。故曰病在陽者命曰風・病在陰者命曰痺・陰陽俱病命曰風痺。…」 （註）病在陽之陰者・刺陰之經…配穴の補滴の論でもある。

「…病有形而不痛者・陽之類也・無形而痛者・陰之類也。無形而痛者・其陽完而陰傷之也・急治其陰・無攻其陽・有形而不痛者・其陰完而陽傷之也・急治其陽・無攻其陰。陰陽俱動・乍有形・乍無形・加以煩心・命曰陰勝其陽・此謂不表不裏・其形不久。…」

病の所在の陰陽と治則を言う。

「…風寒傷形・憂恐忿怒傷氣・氣傷藏・乃病藏・寒傷形・乃病形・風傷筋脈・筋脈乃病・此形氣外内之相応也。…」

外感病は風・寒であり形や筋脈を傷ぶり、内傷病は氣を傷り臟を病ましめる、と言う。

「…久痺不去身者・視其血絡・尽出其血。…」

「…形先病而未入藏者・刺之半其日・藏先病而形乃病者・刺之倍其日。…」

病の性質と治療期間を予測する為の原理である。

⑦『靈枢』経脈第10

「…諸絡脈皆不能經大節之間・必行絶道而出・入復合于皮中・其会皆見于外・故諸刺絡脈者・必刺其結上・甚血者雖無結・急取之以瀉其邪而出其血・留之為痺也。…」

絡脈論である。

⑧『靈枢』衛氣失常第59→「皮」「肌肉」「血氣」「筋」「骨」の判断

「…色起兩眉薄沢者・病在皮。唇色青黄赤白黒者・病在肌肉。宮氣濡然者・病在血氣。目色青黄赤白黒者・病在筋。耳焦枯受塵垢・病在骨。…」

（註）病在血氣…

「…夫百病变化・不可勝数・然皮有部・肉有柱・血氣有俞・骨有属…、…皮之部・俞于四末。肉之柱・在臂脛諸陽分肉之間・与足少陰分間。血氣之俞・輸于諸絡・氣血留居・則盛而起。筋部無陰無陽・無左無右・候病所在。骨之属者・骨空之所以受益而益腦髓者也。…」

（註）骨之属…

皮有部…

足少陰分間…

血氣之俞・輸于諸絡…

骨空之所以受益而益腦髓者也…

病の五体の各々における変化の着眼点について記述している。それはまた、治療に際しての

着眼点であり配穴点でもある。

「…夫病変化・浮沈深淺・不可勝窮・各在其処・病間者淺之・甚者深之・間者小之・甚者衆之・随變而調氣・故曰上工。…」

（註）甚者衆之…

間者小之…

病の「間・甚・深・淺」に対応する刺法の大原理を記述している。

⑨『靈樞』陰陽二十五人第 64

「…美眉者・足太陽之脈・氣血多。惡眉者・血氣少。其肥而澤者・血氣有余。肥而不澤者・氣有余・血不足。瘦而無澤者・氣血俱不足。…」

血氣の多少の判断を記述している。

「…黄帝曰・刺其諸陰陽奈何・歧伯曰・按其寸口人迎・以調陰陽・切循其經絡之凝滯・結而
不通者・此于身皆為痛痺・甚則不行・故凝滯。凝滯者・致氣以溫之・血和乃止。其結絡者・
脈結血不和・決之乃行。故曰・氣有余于上者・導而下之。氣不足于上者推而休之。其稽留不
至者・因而迎之。必明于經隧乃能持之。寒与熱爭者・導而行之。其宛陳血不結者・則而予之。
必先明知二十五人・則血氣之所在・左右上下・刺約畢也。」

（註）推而休之…

其稽留不至者・因而迎之…

能持之…

則而予之…

調整の枢要問題を論じている。体質とそれが気血の所在の仕方を規定しているので、それを
判然と明らかにして治療する、それが「刺」治療であると言う。

◇経絡の巡りを良くするには「凝縮」を解除する事

◇結絡しているものは『決』して行らせる事

◇「導而下之」「推而休之」「因而迎之」「導而行之」「則而予之」など基本的な方法を
記述している。

⑩『靈樞』刺節真邪第 75→所謂今日の「運動器疾患」全般を「病理」論的に描出

「…邪氣者・虚風之賊傷人也・其中人也深・不能自去。正風者・其中人也淺・合而自去・其
氣来柔弱・不能勝真氣・故自去。虚邪之中人也・洒淅動形・起毫毛而癢腠理。其入深・内搏
于骨・則為骨痺。搏于筋・則為筋攣。搏于脈中・則為血閉不通・則為癰。搏于肉・与衛氣相
搏・陽勝者則為熱・陰勝者則為寒・寒則真氣去・去則虚・虚則寒。搏于皮膚之間・其氣外
癢・腠理開・毫毛揺・氣往来行・則為痒。留而不去・則痺。衛氣不行・則為不仁。虚邪偏容
于身半・其入深・内居營衛・營衛稍衰・則真氣去・邪氣独留・癢為偏枯・其邪氣淺者・脈偏
痛。虚邪之入于身也深・寒与熱相搏・久留而内著・寒勝其熱・則骨疼肉枯・熱勝其寒・則爛
肉腐肌為膿・内傷骨・内傷骨為骨蝕。有所疾前筋・筋屈不得伸・邪氣居其間而不反・癢于筋

溜。有所結・氣歸之・衛氣留之・不得反・津液久留・合而為腸溜・久者數歲乃成・以手按之柔。已有所結・氣歸之・津液留之・邪氣中之・凝結日以易甚・連以聚居・為昔瘤・以手按之堅。有所結・深中骨・氣因于骨・骨與氣并・日以益大・則為骨疽・有所結・中于肉・宗氣歸之・邪留而不去・有熱則化而為膿・無熱則為肉疽。…」

(註) …中于肉・宗氣歸之

⑪『靈樞』四時氣第 19

「…溫瘡汗不出・為五十九疔。風疔膚脹・為五十七疔・取皮膚之血者・盡取之。飡泄・補三陰之上・補陰陵泉・皆久留之・熱行乃止。轉筋于陽治其陽・轉筋于陰治其陰・皆卒刺之。徒疔・先取環谷下三寸・以鉞鍼鍼之・已刺而筭之・而內之・入而復之・以盡其疔・必堅・來緩則煩惋・來急則安靜・間日一刺之・疔盡乃止。……著痺不去・久寒不已・卒取其三里骨為干。……小腹控臑・引腰脊・上衝心・邪在小腸者・連臑系・属于脊・貫肝肺・絡心系。氣盛則厥逆・上衝腸胃・燠肝・散于肓・結于臍。故取之肓原以散之・刺太陰以予之・取厥陰以下之・取巨虛下廉以去之・按其所過之經以調之。善嘔・嘔有苦・長太息・心中憺々・恐人將捕之・邪在胆・逆在胃・胆液泄則口苦・胃氣逆則嘔苦・故曰嘔胆。取三里以下胃氣逆・則刺少陽血絡以閉胆逆・却調其虛實以去其邪。…」

小腹痛腫・不得小便・邪在三焦約・取之太陽大絡・視其絡脈與厥陰小絡結而血者・腫上及胃脘・取三里。……」

(註) …風疔

飡泄

徒疔

骨為干

環谷下三寸

筭

臑系

心系

肓原

憺々

却

三焦約

太陽大絡

厥陰小絡

「四時氣」〈季節的變動〉の「邪氣」が身体にもたらしている變動の病証と治療の基本を論じる。